2017

LA NOUVELLE

No.18
PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 藤倉洋一（昭 45）
2017.4.1 発行

第 22 回サロン仏友会

去る 11 月 19 日（土）恒例のサロン仏友会が本郷サテライトで開催され、51 名の出席者で賑わった。今回の講演では、昭和 49 年卒の公認会計士、泉登茂子氏がそのバイタリティー溢れる生き方を披露された。また、懇親会のボジョレ・ヌヴォも例年に増して好評だった。今回も、大勢の皆さんにお手伝いいただき、手作りの懇親会となった。以下に、泉氏自身によるまとめのご投稿を掲載する。

ボジョレ・ヌヴォを手に、講師を囲んで談笑

Aix-en-Provence から始まった コスモポリタン登茂子流生き方

泉登茂子（昭 49）

引っ込み思案だった私が、どうして今の私になったのでしょうか。

両親は兵庫県出身、公務員家庭のひとり娘で、２歳頃東京に来ました。何かあれば一人で生きていかなくてはならないとの不安が、心の隅に子供らしからぬ影を落としていました。

1．フランスに留学するまで

今はビル化している千代田区四番町ですが、当時は戦災を受けた蔵が残るお屋敷町。数え年６歳６月６日から日舞を習い、地元区立幼稚園から区立小学校に進学しました。小３で父が新潟市に転勤、ピアノを習い始め、２年後東京に戻り、千代田区立中学に入学。算数は答えが明確に出るところが好きで、数学者になりたいと思っていました。

東外大に入学したものの学園紛争で２か月の自宅待機。授業が始まって、言語学はスイスの数学者 F. ソシュールが始めたものと知り、興味を持ちました。しかし、肝心の仏語が上達せず、３年間で卒業単位を取得し、４年の夏休みに渡仏。やりたいことを反対されたことはありませんが、それは母が私の意志をいつも父に伝えていたからでした。

2．Aix-en-Provence で吸収したこと

夏期大学ツアーに参加し、西海岸のラ・ロシェルへ。３年間仏語を学んだとはいえ、文化や習慣で戸惑うことばかり。黙って熱心に授業に聞き入っていたところ、独人女学生から「何にも言わないと先生に誤解されるから、自分の思ったことはちゃんと言わなくちゃ」と指摘され、意識改革を始めました。国別のお祭りで、日本の唱歌を歌い、「登茂子のマダム・バタフライが聴きたい」と注目されました。パリで仏人の家庭に１か月下宿、後に「話をしないので、何をしてあげたら良いか分からなかった」と聞きました。まだ、従来の行動パターンを引きずっていたのです。

新学期から Aix-en-Provence 大学に入学。自分一人で入学手続きや下宿探しなどをしなければなりませんでしたが、不安より楽しみが勝っていました。大学と語学学校に在籍し、休暇は友人とヒッチハイクでスペイン旅行をしたり、イタリアやオランダの友人宅に遊びに行ったり、週末は大学のバス旅行で、モナコやカンヌ映画祭、ニースのカーニバルなどを楽しみました。大学寮にも遊びに行き、北アフリカの留学生と交友を深めました。

１年間は、生活に慣れるだけで精一杯、パリで仏語の勉強を続けることを決意し、Alliance Française 仏語教職課程に入学。平日は学校、週末は仏人家庭で過ごし、休暇はノルマンディーの別荘に同行して、フランスでの生活を満喫しました。教職課程を終え、後ろ髪を引かれる思いでパリを後にしました。帰国後は、絵画系専門学校で仏語を教えていましたが、語学を活かして何かできることがないかと悩む日々が続きました。

3．なぜ公認会計士に

占い師から金融に関する職業が向いていると言われ、車中吊り広告で「公認会計士」に目が留まりました。ウェブのない時代で情報収集に１年掛かり、30 歳代半ばから専門学校に通い、３年間勉強して第２次試験に合格、大手監査法人東京事務所国際部門に入所。合格後、亡き父は職場で組織内会計士の養成を提案・実践していたことを知りました。結婚しか望んでいなかった父ですが、草葉の陰で喜んでくれていると思います。

国際部門のクライアントは米国基準準拠財務諸表を作成するため USCPA を取得し、東南アジアやモロッコの ODA 関連海外財務調査で英語や仏語を活用しました。女性の海外駐在は難しい時代、単身 NY に行き一般事業会社内部監査部で米国の実務を経験しました。9.11 後に帰国して個人事務所を開業。現在は、法定監査や中小企業支援に携わり、地元では起業家養成講座の講師をしています。小中学生を対象とした会計講座「ハロー！会計」も実施し、会計に対する意識や説明責任の重要性を伝えています。

4．登茂子流生き方のコツ

日本公認会計士協会では創設 60 数年で初めて女性会長が誕生。女性会計士は２割弱ですが、海外での比率はより高く、協会は女性活用促進問題を組織的に取り組み始めました。母は今年 95 歳、数年前から自宅介護をしています。母の介護をしながら事務所で仕事をし、私を支えてくれる主人に感謝しています。

困難な問題に遭遇しても、すぐには諦めず、どうしたら実現できるか考え、人生を乗り切っていける自信がやっと出てきました。東外大の学生は語学が強みですので、卒業生からグローバルに活躍する公認会計士が育っていくよう支援していきたいと思います。

南仏の旅～アーチスト達の足跡を辿る（その１：プロヴァンス編）

椎名隆一（昭 57）

私と南仏との最初の出会いは 1970 年代半ば。当時、南仏とは地中海を隔てて対岸に位置する北アフリカでプラント貿易の仕事をしていました。その時に、休暇を利用して Marseille からドライブでプロヴァンスや地中海の主だった都市・村々を回ったのです。以来、南仏は５回ほど訪れていますが、特に 2015 年、2016 年と２年続けて出かける機会に恵まれ、西はスペイン国境近くから東はイタリアの手前まで、地中海沿岸をぐるっと旅することができました。

今回は、まずプロヴァンス地方について、画家 Paul Cézanne (1839-1906）と Pablo Picasso (1881-1973）の二人の巨匠の足跡も辿りながらご紹介したいと思います。

プロヴァンスの中心都市 Aix-en-Provence では、町の象徴となっている大噴水のあるド・ゴール広場（La Rotonde の名称で親しまれています）の周辺に、カンヴァスを背負う Cézanne の彫像がさりげなく置かれ、Cézanne という名前の映画館やカフェがあり、美術館に入ると Cézanne の絵画が幾つも展示され、まさに今もこの画家の息遣いが感じられます。また、町の中心部から北に延びるゆっくりとした坂道を登っていくと、やがて Cézanne のアトリエが見えてきます。70 年代に南仏を旅したときもここにきました。2015 年の夏に 40 年ぶりに訪れて、その変わらない姿に感動しました。さらに坂を進むと、この画家が生涯描き続けたサント・ヴィクトワール山（Mont Ste-Victoire）がよく見える地点があります。ここからは Cézanne の描く絵そのものの「聖なる山」の眺望を楽しむことができます。

さて、昨年秋のプロヴァンス再訪の際は、Cézanne がイーゼルと絵筆をもってよく出かけたとされるサント・ヴィクトワール山へ至る街道（『Cézanne の道』）を旅してみました。車で行くと、①山の南側を通るルートと、②（ダム用の人工湖が多い）山の北側を廻るルートがあります。サント・ヴィクトワール山は、見る方角によってかなり姿を変えるのですが、Cézanne の絵でよく目にする石灰岩の岩肌がむき出しになっているサント・ヴィクトワール山は、①の南側ルートから見える姿です。この街道を走行中に見た「聖なる山」は、秋という季節のせいか、白い衣をまとったような美しい姿でした。（なお、さらに進んでサント・ヴィクトワール山の麓までくると、荒々しい岩肌が無表情にさらけ出されていて、間近にみるその姿はさすがに「あばたもえくぼ」というわけにはいきませんでしたが。）

次に②の北側ルートの方を辿ってみましょう。最初はサント・ヴィクトワール山の外観はさほど変わりませんが、さらに行くと Picasso が眠る墓地があるヴォーヴナルグ（Vauvenargues）という静かな雰囲気の村に到着します。この辺りから見えるサント・ヴィクトワール山は、もはや岩肌むき出しではなく、青々とした樹木に覆われ、東西に延びるなだらかな勾配の姿を見せています。Cézanne を長年敬愛した Picasso は、Cézanne が描いたこの山の麓にある 17 世紀に建てられた城館（Le Château de Vauvenargues）（写真）が 1958 年に売りに出された時、直ちに購入を決断。親しい友人に「僕はサント・ヴィクトワール山を手に入れたよ」と喜んで電話したそうです（実際、城を購入したとき、Picasso はサント・ヴィクトワール山北麓の広大な土地も同時に購入）。ここで、Picasso は、なかば隠遁生活者のように都会の喧騒から離れ創作活動に没頭。サント・ヴィクトワール山を背景にした城館の姿を幾つかの作品に残しています。しかし、老いの身には吹き付けるミストラルがきつかったのでしょうか。この城館には２年半程度しかとどまらず、1961 年、コート・ダジュールのムージャン（Mougins）に購入した館（Notre-Dame de Vie）に移り住み、人生の終焉を迎えます。しかしながら、永眠の地に選ばれたのはやはりこの Vauvenargues の城館。実は、この地を墓所に決めたのは、彼の最後の妻ジャクリーヌと最初の妻オルガとの間に生まれたパオロだそうです。今、こうして、Picasso は、ジャクリーヌとともに、Cézanne ゆかりのサント・ヴィクトワール山の懐に抱かれて永遠の眠りについています。

なお、2009 年に Picasso が Vauvenargues に住みだしてからの 50 周年を記念してエクス市内にあるグラネ美術館（Musée Granet）で Picasso/Cézanne 展が行われました。Cézanne の画風はキュビズムの源流ともいわれ、スペインからパリに出てきた若き Picasso に大きな影響を与えました。Picasso が所有する Cézanne コレクションは相当なもので、静物画に描かれるリンゴや、人物画の水浴のシーンを描いた作品などに Picasso は大いに刺激を受けたとされています。展覧会は、Picasso と Cézanne のこうした深いつながりを再発見する試みだったようです。

第 22 回仏友会総会のお知らせ

日　時：2017 年 4 月 22 日（土）午後 2 時～ 5 時
午後 2 時～ 総会、 2 時 30 分～ 講演
3 時 50 分～ 写真撮影＆懇親会

会　場：大手町サンケイプラザ 201・202 号室
（東京メトロ大手町　E1 出口）

講　師：渡辺昌俊氏（昭 32）日本パスツール財団代表理事
（元東京外語仏友会会長）

演　題：「銀行員の見た日仏関係の変遷」

渡辺氏は、群馬県前橋市出身、卒業後東京銀行（現在の東京三菱 UFJ 銀行）に入行。3 度のパリ支店勤務をはじめ、在日インドスエズ銀行や日本パスツール財団での要職に就かれ、フランスとの途切れることのないパイプを通じて、同国に多大な貢献をされたことはご存知の方も多いと思います。その活動は多岐にわたり、パリでは日本商工会議所会頭やパリ大学都市日本館の理事を務め、日本ではパリクラブ（日仏経済クラブ）の設立や「国境なき医師団」の活動にも奔走され、文字通り日仏の懸け橋として全身全霊で貢献され、フランス政府から 2 度も叙勲されておられます。

今回は 1960 年～ 80 年代の氏の銀行時代にスポットを当て、知られざる疾風怒濤の経験談を披露していただきます。お誘いあわせの上お出かけください。

参加費：5,000 円
2017 年度分通信費 1,000 円も同時に受け付けます。

申込み：4 月 16 日（日）迄
メルアド保有の登録会員には e-mail で、それ以外の登録会員には往復はがきでご案内しています。

申込み先：藤倉洋一：fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp
Tel/Fax 048-822-4540
勝亦杏子：anzuko@k08.itscom.net

≪パリ便り≫
ワーキングホリデーを選んで

上野聡子（国際社会学部フランス語専攻４年）

物心ついてから 20 年ほど、毎日学校に通って授業を受けるという生活をしてきました。そんな生活から初めて脱して今、パリにいます。

去年の９月に大学を休学し、ワーキングホリデービザにて渡仏、パリで働き始めて４か月ほど経ちました。最大１年で日本に帰らなければいけないビザのため契約は CDD(Contrat à Durée Déterminée) ですが、週に 35 時間、７時間× ５日、フランス人と同じ条件・環境で働いています。毎年外大からは何十人もの学生が渡仏しますが、そのほとんどは留学のためであり、学部の途中に外国でフルタイムで働いているパターンは非常に少ないのではないかと思います。まず、ワーキングホリデービザとは、18 歳から 30 歳を対象に人生に一度だけ発給される一年間有効のビザです。フランスと日本の若者の国際交流を促し、互いの親交および理解を深めることを目的としています。そのためこのビザの所持者は現地での生活費を賄うための就労が認められており、また、語学学校へ通う自由もあります。ビザ申請には料金はかからず、条件を満たしていれば審査も前向きに行われるそうですが、毎年規定枠よりも希望者が少ないそうです。

わたしがフランスにこのビザを使おうと思った理由は、当初考えていたフランスの大学留学の出願の際に志望動機がどうしても書けず、わざわざフランスの大学で何を勉強したいのかがわからなくなってしまい、それならば自分の力で滞在費も賄いつつ、学生生活からでは見えない他国の姿を見てみようと思ったからでした。

渡仏してから CV を書いて仕事を探し、日本でのアルバイト経験を活かしながらできるだけ多くのフランス人と話してみたくて、サロン・ド・テの併設されているお菓子屋さんで働くことになりました。もちろん忙しい時はお客さんと世間話をしている余裕もなくなるのですが、そうでない時はお客さんの方から話しかけてくれることもあります。前評判に違わずフランス人は本当におしゃべり好きです。日本で同じ仕事をしていたときとは比べ物にならないほどお客さんと会話することが多いです。わたしが日本人だからかも知れませんが、日本が好きだと嬉しそうに話してくれるお客さんも多く、中にはわたしが知らないような日本の事柄について熱心に語ってくれる方もいます。特に詳しくはないけど…と言うフランス人も「こんにちは」「さよなら」「ありがとうございます」などいくつかの日本語を知っていて、よく驚かされます。日本で普通に過ごしている日本人が知っているフランス語といえば Bonjour くらいしかないのではないだろうかと思うのですが。

そしてそんなフランス人たちと話しているうちに、フランスの若者の将来への選択肢の多いことに気づきました。同じ職場に、高校を卒業しバカロレアを取った後、そのまま進学しないでスタージュ (研修) をしている女性がいました。期間は１年間で、自分の興味のある分野の仕事にフルタイムで就いてみて、それから大学をどうするのか決めるんだと話していました。彼女と話したのは彼女のスタージュの終了間近の時でしたが、この仕事は自分には向いてないかも、と笑っていました。フランスでは彼女のように、大学に入る前にスタージュをしたり、もしくは大学に入った後にしたりすることは非常に多いそうです。わたしはそれがとても羨ましかったです。高校で進路を考えている時や、大学に入ってからも、いまいち自分がどうしたいのかわからず進んできてしまいましたが、もし、例えば大学に入る前に、彼女のように実際に毎日フルタイムで社会の中で働いていれば、折角の４年間の大学生活をもっとみっちり有意義に過ごすことができたのでは、と思わずにはいられません。

どこの外国に留学しても日本との差を感じるとは思いますが、その地でその地の人間と働いてみる、ということも、就職を前にして人生を考える時期である大学生にとっては非常に大きなことであると思います。外大は大部分の学生が留学を経験する、という点で他大とは異質だとは思いますが、それでも基本は４年ないし５年で卒業してそのまま新卒として就職する、というルートです。それが「普通」です。最近は、留学やインターンが多く行われるようになりましたが、期間は短く、まだ「普通」ではありません。日本でももっと色々な選択肢が広く認められ、また挑戦しやすくなるといいし、わたしのエピソードが幅広い選択肢の一つとして、これからの進路の選択に悩む外大の後輩たちの参考になれば幸いです。

今日も京都へ BIENVENUE！

佐藤 由紀子（昭 53）

訪日外国人観光客は近年増加の一途、そして彼らを外国語で案内するのが通訳案内士です。私は一昨年東京から京都に移住し、この仕事を始めました。前職はフランス観光開発機構で、在職中に運輸省通訳ガイド試験（当時）に合格したものの、すぐガイドにはなりませんでした。ここ数年の統計でも通訳案内士試験の合格者のうちガイド登録（各都道府県で受付）している人は平均１割にも満たず、今年２月現在で京都府の仏語通訳案内士は 58 名とのこと。

私のガイド初仕事は 2015 年７月、ベルギー人家族を定番コース（金閣寺、龍安寺、二条城、清水寺＋祇園散策）にご案内しました。京都に来る前はずっと雨だったとかで京都の夏の晴天に大喜び。屋内より屋外、日陰より日向を好んで歩くので暑さと緊張で疲労困憊のデビュー戦でした。ガイドの繁忙期は春と秋の観光シーズンで本格的なガイド稼業は昨年春から。ガイド登録をしてもなかなか実戦の場がない人も多い中、順調に仕事が入ったのは関西の仏語通訳案内士が少ないのと、前職ゆえ旅行業界に多くのつてがあったおかげです。大手旅行社は今やどこもインバウンドに力を入れていますが、私が日本人をフランスに観光誘致する仕事から転じて仏語圏の観光客を日本に迎える側になった 2015 年は、奇しくもインバウンドがアウトバウンドを初めて上回った年でもありました。

京都で迎える欧州仏語圏の観光客の大多数はシニアの夫婦。教養があり、歴史や文化に興味があって旅行経験も豊富な人たちです。時には返事につまるような質問もされますが、異なる視点で日本を見直す機会にもなって面白いものです。この仕事はやればやるほど自分の無知を知らされる、とはあるベテランガイドの弁ですが、本当にそのとおり。お客様とは一期一会で毎回が一発勝負の感があります。ありがたいことに、前職で得られたフランスに関する豊富な知識はフランス人客のガイドには大変役に立ちます。琵琶湖疎水の赤煉瓦のアーチは Pont du Gard、祇園の細い裏道はリヨンの traboule などにたとえ、二条城で大政奉還のあった大広間を案内する時には徳川慶喜がナポレオン三世に贈られた軍服を着た写真を見せるなど、フランスにからめた説明をすると興味が増すようです。

別れ際に、あなたに案内してもらえてよかった、楽しい１日だったなどの言葉をもらうと疲れも吹き飛びます。今後もそんなニッポンファンを増やしていきたいものです。

フランス語劇の風景

仏友会会長　**藤倉洋一**（45 年）

上演を４日後に控えた 11 月 15 日（火）、午後４時からの通し稽古に立ちあった。外語祭での本番がサロン仏友会と重なったためだ。プロメテウス・ホールで、代表の山本佳織さんと監督兼副代表の三木薫子さんが優しい笑顔で迎えてくれた。当方は幹事の中村日出男さんと私の二人である。

「オペラ座の怪人」に挑むとはなかなかの勇気である。但し、今回は、衣装もまだ完全ではなく、舞台装置も何もない状態で、集音マイクなしのリハーサルだ。川口先生も駆けつけてくれた。怪人エリック役は小出隼也君、ラウル役は宮崎乃輝君で、面白い試みは主役のクリスチーヌ役がダブルキャストで前半を長田美香さんが、後半を丸岡春奈さんが演じること。この二人の歌唱力は抜群である。フランス語の指導は Le Bois 先生とフランス人留学生（！）が行ったという。

キャスト・スタッフらと（右端が筆者）

全体的な舞台の運びは、踊り、会話、歌が織り交ぜられ、オペラ座の雰囲気を醸し出そうとしている。出演者の動きは、ややぎこちない箇所も散見された。OB 世代には、ロイド・ウェバーの英語版ミュージカルに馴染みがあるが、フランス語での上演鑑賞はまたとない機会である。70 分があっという間に過ぎた。

リハーサル後、ホール食堂前に全員が集まってくれた。激励の言葉を贈り、恒例のお祝い金を代表に手渡す。毎年２年生が語劇を行うが、今年は 60 人のうち 47 名が携わっているという。驚いたのは、そのうち男性はたったの７名。道理で華やいでいたわけだ。礼儀正しいし、生き生きとしている。

帰り道、「Solidarité」という言葉を思い起こしていた。19 日の本番が成功となり、この共同作業が学生たちの楽しい思い出となって刻まれ、いつか仏友会でその思い出を語り合うようになってくれることを祈りつつキャンパスを後にした。後日、山本代表より、ホールに入りきれないほどの観客で、大成功だったとの報告があったことを付記しておく。

昔日の青春　**佛友會々報**

80 年のタイムカプセルを開ける　13

坂井英俊（昭 40）

「満州事変」たけなわの頃、外語青年たちは何を考えどんな気分で日を送っていたのであろうか。例えばこれは昭和８年卒、小林留木氏の寄稿である。＜女学校経営３年、一番いやなのは、女の子が真剣になれないことです。悉く有閑的、遊び半分です。火の出るやうな私の活動に惹きつけられる子供もあるにはあるが、それとてどこまでも一緒に行ける者ではない。しみじみ過去の男性の罪を感じます。さて去年からは男子の真剣な学校を始めました。懸崖によって手を放さうといふきわどい所に身を置くていの「生活の道場」を築き上げ度いと念じて居ります。二十名足らずです。師弟共に働き、ともに学び、その成果でともに食ふのです。俸給といふ風のものもまず無し、学費も要らないといふわけです。物的の成功はなかなか得難いが、精神的の方は確かに金的を射ました＞　　柳条湖事件・桜田門事件（天皇へのテロ未遂）・上海事変・五・一五事件（クーデタ未遂）・満州国の建国宣言・国連脱退と、国内は息をもつかせぬ波乱の戦時であり、教育界もいろいろな統制や試行錯誤の中で混乱した。学校を増やせば教員が不足した。こうした情勢下では、松下村塾や「新しき村」のような私塾が出現したのであろうか。「火の出るような私の活動」「懸崖によって手を離す」「生活の道場」「精神の方は金的を射た」などの譬え回しは異様に切迫しており、儒教・仏教・神道やその日本的情念を濃縮して作られた激しい信仰宗教のようにも見える。「過去の男性の罪」とは？男性社会が「遊び半分の」呑気な女生徒ばかりを増やし、刻苦精励の「烈女」タイプ？を育ててこなかったことを言うのか。だが彼自身も、女性を「半人前の弱き奉仕者」として守り愛した平均的日本男性の一人ではなかったのだろうか。「男の罪」だと断罪するのだから、心の半面では「自立できる強い女になれ」「国の役に立て」と願っていたのか、男女問題の自らの立ち位置は彼自身にもよくわからないようだ。小林氏は人格清廉、あたかも漠然たる理想へとはやる行動家、悲憤慷慨の青年将校のようである。やがて戦地へ赴く青年たちの気高い自己犠牲心（尽忠報国・七生報国）も、こうした苦悶の昇華、その究極の形無き形として燃え上がった、いわば輝ける焦燥感に出たものだったのであろうか。

同じ年の在学３年生、思峯氏は、＜夢の間に斯うして一つ一つ年を重ねてゆく。何だか人生いや人間の短さがこの悠々なる自然にたいしてしみじみと味ははれる。そしてこの大いなる自然の中にわづかの生命をせせこまと一日一日を追はれて生活してゐるかと思ふと何故かしら寂寥を感ずる。（中略）本当を言ふと今の世は實に駄目である。何萬何千年の過去を背負った今日では人間社会は単にその惰性によってのみ動いている様にしか思はれない。此頃社会の胸を去りたがる若い人間が頻出する様だ。實際若人の死ほど我々の心を傷つけ悲哀の情を起こさしめるものはない。一般現実生活が極端に外的となり皮相的となった様だ。（中略）人間社会が集団化してきた時に於て一人のみ社会の圏外に生きることは凡そ不可能な事である。教育界の醜事件（長野県教員赤化事件・滝川事件を指すか）の如き、全く人間の精神の不統一を示してゐるものだ＞　と、彼もいまや寂しく達観している。

同じ昭和９年卒の貴志忠直氏も、＜みんながさうやってゐるのでただぼんやり引きずられる気持で髪の毛をのばし始めたのが、たしか１年の２学期だった。それもまだかっこうがつかずに、針金程も剛い毛を百日かづらの様にぼうぼうさしていた頃の或日教室に入ってこられた増田先生が、あの笑ひ方でニヤリとやってから「貴志君。なんとかかっこうつけろよ」と言はれたのを思ひ出す毎に、私の手はそろそろ禿げ上がって来た額の生え際をつひ撫でて見る。　ベルギー人で、フランス語とラテン語を教へて呉れたソブリといふ老先生がゐた。さう大分のお年でほんとにお爺さんといふ感じの人だったが、せがまれるままに、おそらく歯の、生きた歯のほとんどない口をあけて「フレール・ジャック、フレール・ジャック・ドルメーヴー」と唄ってくれたのを実に静かな気持ちで思い出す。こういったたわいのない、しかもなつかしい数々の思ひ出が時の流れといっしょに古い写真のやうにだんだんとぼやけうすれ行くのをこの頃私はしみじみと淋しく思ふ＞　やはり思想統制の暗黒時代に煩悶する若者たちだからか、戦争への批判は決してみせようとしない。

思えば現代も世界の歴史は劇的に変わってゆく。が鳥瞰的には古代より同じ歴史を繰り返しているだけにも見え、かけがえのない今この瞬間も、容赦なく過去へと削除されてゆく。人生は夢、やはり思い出が全てなのかもしれない。亡き恩師ソブリ先生の唄声が聴こえてくる。温かく懐かしい日常をここに伝えてくれるのは、80年も昔の茶色に変色したささやかな「仏友會報」の中の一文である。

（次回へつづく）